第３章　京都大学北部構内ＢＪ31区の発掘調査

宮本一夫

１　調査の経過

本調査区は，京都大学北部構内北端，御蔭通りに隣接した地点に位置する（図版１-153）。京都大学北部構内一帯は，縄文前期～晩期の北白川追分町遺跡にあたっており，この遺跡の北限がどの地点にまで達するかが，従来問題とされてきた。本調査区に近接した理学部合同建物予定地の試掘調査では，縄文土器が出土しており，旧白川の分流による後背湿地を形成していたと推定されている〔泉78〕。したがって，本調査区もこれに連続した地形をなすと予想され，北白川追分町遺跡の北限である可能性も想像された。

ところが，昭和58年度の試掘調査の結果では，中世包含層のみが検出された。近接する田中神社付近には，中世において，田中の郷民が自衛のために構（かまえ）を設けたとされる。自衛村落である田中構は，文献では，『親長卿記』文明６年（1474）８月１日の条に初出している。その後，天文法華の乱（1536年）の際，法華衆徒によって燃き打ちされ，事実上崩壊したものと推定されている。すなわち，15世紀後半から16世紀前半にかけて存続していたものと考えられる。こうして，文献にみえる田中構と試掘調査で検出した中世包含層との関連が注目されるところとなった。

このような状況のなかで，ここに農学部初期胚操作動物実験棟の新営が計画されたため，発掘調査を実施した。北白川追分町遺跡の広がりと，田中構との関連を追求することを調査目的としたのである。

２　層　　位

本調査区の層位は，東から西に向かって緩傾斜を呈し，Ｙ＝2580付近を中心に，調査区の西半部と東半部で異なった様相を示している（図13）。西半部では，基本的層序は，表土（第１層），灰褐色土（第２層），茶褐色土（第４層），黄褐色砂質土（第６層），暗褐色粘質土（第７層），東半部では表土下で茶褐色砂質土（第３層），黄白色砂質土（第５層），黄褐色砂質土，暗褐色粘質土の順である。近世の遺物包含層である灰褐色土は，東半部で茶褐色砂質土を切っている。大正11年の地籍図「京都帝國大學北方敷地」（京都大学経理部蔵）によると，調査区一帯が水田であったことから，本調査区には近世から近代にかけて棚田が形成

されていたことが想定される。しかし，西半部にくらべて高い東半部は，その後の土地利用の過程で削平されたため，近世の遺物包含層が検出されなかったものと考えられる。

中世の遺物包含層は，調査区中央部を南北に流れる流路ＳＲ１を境にして，東西で明確に層位が異なっている。西半部では，この流路に切られる形で，厚い中世の遺物包含層を形成する茶褐色土が検出された。出土する土師器の年代からみて，この堆積層の上半と下半との間には大きな年代差は認められず，15世紀～16世紀初頭のものである。茶褐色土下面に位置するＳＸ１も，同時期のものである。また，東半部ではＳＲ１との切り合い関係は不明なものの，表土下に茶褐色砂質土が広がっている。出土遺物は中世を主体とし，そのほかに古墳時代のものが相当量存在する。茶褐色砂質土は，出土する土師器から中世の遺物包含層とすることができるが，茶褐色土のものにくらべ，年代的に古い傾向を示している。

茶褐色砂質土下の黄白色砂質土の上面では，流路ＳＲ２や建物跡ＳＢ１が検出された。ＳＲ２の年代は下限が７世紀初頭である。茶褐色砂質土下に位置する黄白色砂質土は，遺物をほとんど含んでいない。黄褐色砂質土は，調査区全体に認められ，古墳時代から弥生時代までの遺物を少量含んでいる。

黄褐色砂質土より下は地山であるが，調査区南壁に添って遺跡の基盤となる堆積層の観察をおこなった。その結果，暗褐色粘質土，灰白色粘質土，高野川系砂礫の順に堆積層が確認された。このうち，高野川系砂礫は調査区西側に向かって山なりに高くなって堆積している。したがって，高野川系砂礫が自然堤防の役目をはたし，そこに暗褐色粘質土，灰白色粘質土が堆積したものと想定される。

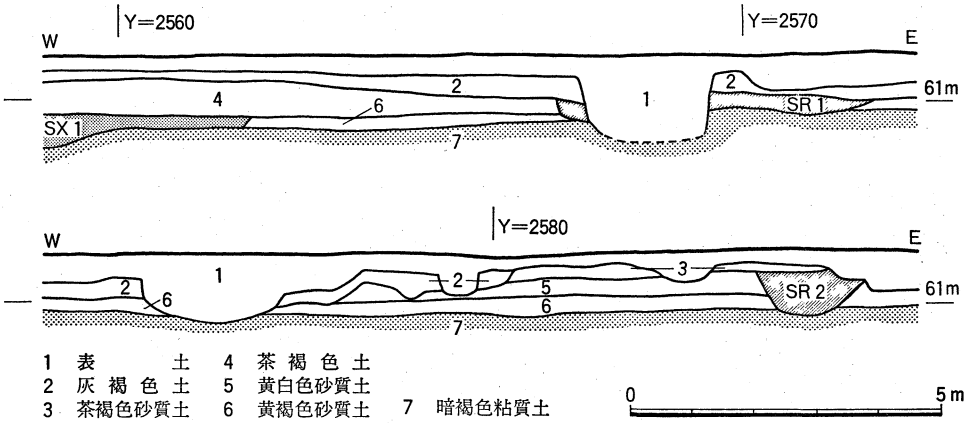

図13　調査区北壁の層位　縮尺1/120

3　遺　　構

本調査で確認された遺構は，古代，中世，近世にわたっており，各時代の溝，流路，井戸，建物跡などが検出された。

(1)　古代の遺構（図版８・９-1，図14）

流路ＳＲ２，建物ＳＢ１がある。ＳＲ２は，埋積土に，青灰色の水成層をもたず，黄褐色砂質土だけからなっている。北東から南西方向へむかってほぼ傾斜にそって流れており，安定した流路というよりは，一時的な流路，すなわち河川の氾濫などにともない，短期間に形成された流路と考えられる。埋土中に含まれる遺物は，古墳時代前半の布留式段階の土師器が主体を占めるが，６世紀末～７世紀初頭の須恵器杯身を含む点からみて，７世紀初頭以降の流路と考えられる。

また，このＳＲ２に切られた黄白色砂質土上面には，ＳＢ１の柱穴が検出されている。柱間２間×２間の正方形の掘立柱建物跡であるが，その性格は不明である。ＳＢ１は，中世の茶褐色砂質土より下位に，そして古墳時代の黄褐色砂質土より上位に位置することから，その年代を古代にあたるものと考えておく。

(2)　中世の遺構（図版９，図15）

流路ＳＲ１，井戸ＳＥ１，溝があげられる。ＳＲ１は調査区中央部を南北に流れている。埋積土の状況からすれば，恒常的に流れていたものとすることはできず，空堀であった可能性もある。またＳＲ１を境に，中世の遺物包含層がその東西で明瞭に異なる点は興味深い。とくに，この流路の形成時期には，これをはさんで調査区の東半部と西半部では土地利用の差があったと考えることができる。ＳＲ１に切られた茶褐色土は，調査区西半部に位置し，厚い中世の遺物包含層を形成している。しかし，ＳＲ１の埋土，茶褐色土ともに，出土遺物に大きな時期差が認められず，15世紀～16世紀初頭のものと考えられる。

図15に示した西半部の溝群は茶褐色土下面に，また東半部に示した溝群は茶褐色砂質土下面に位置し，両者ともに水田にともなう溝であると思われる。これらの溝群は，一部には溝の方向や間隔の揃うものも見られるが，溝にともなう出土遺物が少ない点や，上面に位置する茶褐色砂質土と茶褐色土との切り合い関係が不明な点から，それらが同時に存在したものかどうかは判断しかねる。また，茶褐色土と茶褐色砂質土の中世の遺物には多少時期差が認められる点も，その判断を難しくしている。ともかく，ＳＲ１下面においても，茶褐色土下面に連続する溝群が検出されるところから，ＳＲ１形成時には，これら溝群が

存在していた可能性は少ない。調査区西半部に堆積する茶褐色土は厚く，それ以前の地形は調査区中央付近で東に高く西に低い段差をもっていたものといえる。茶褐色土の堆積後ＳＲ１が設けられ，それが土地区画として重要な意味をもっていたことが指摘できよう。

また，調査区中央北端では，ＳＥ１が検出されている。ＳＥ１は上部が削平されており，横板井籠組が一段認められたが，水溜部である可能性もある。出土遺物は少なく，年代の特定はできない。したがって，ＳＥ１とＳＲ１や水田にともなう溝群との関係は不明である。なお，調査区北西隅において，不定形土坑ＳＸ１を検出した。ＳＲ１や茶褐色土と同時期の遺物を若干含んでおり，中世後期のものと考えられる。

(3) 近世の遺構（図版９-2，図16）

近世の遺物包含層である灰褐色土は，調査区中央部で南西方向に見られる段差に対して，高さの低い調査区西半部にのみ存在している。この灰褐色土下面には，井桁状に走る溝が検出されている。Ｙ＝2580の付近で南西方向に認められる段差とともに，水田にともなう遺構群であると推定される。この段を境として高い東半部では，近世の遺物包含層を確認することはできなかった。その後の削平によって失われたものと考えられ，段差をはさんで棚田が形成されていたものと想定している。

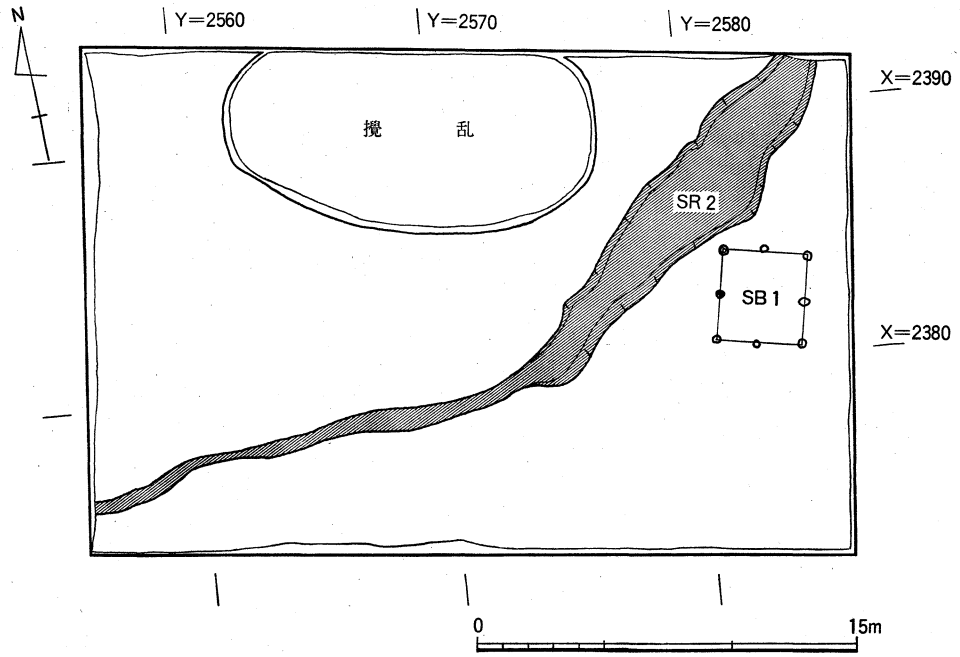

図14　古代の遺構　縮尺1/300

遺　　構

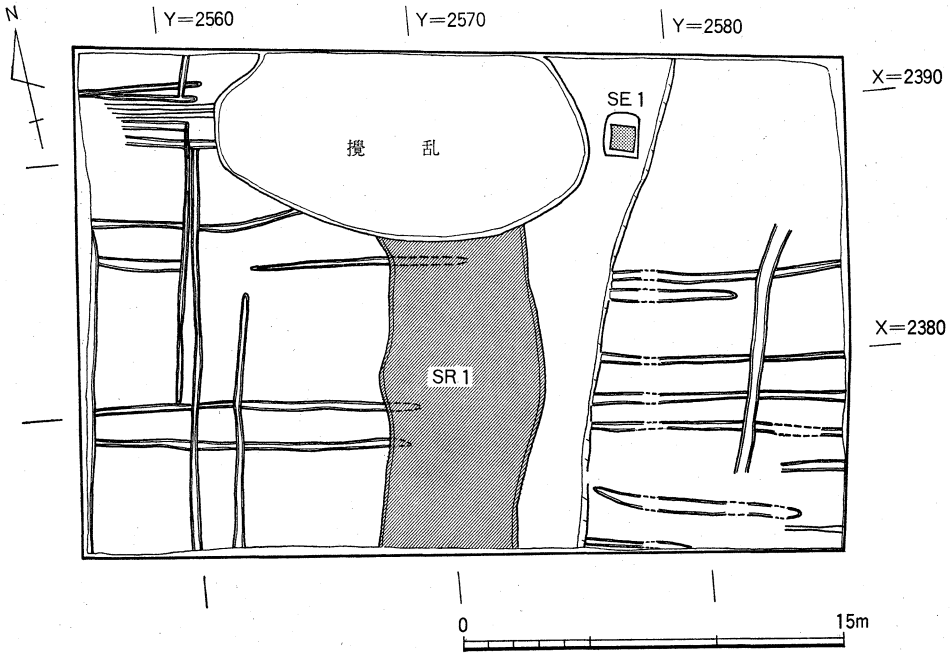

図15　中世の遺構　縮尺1/300

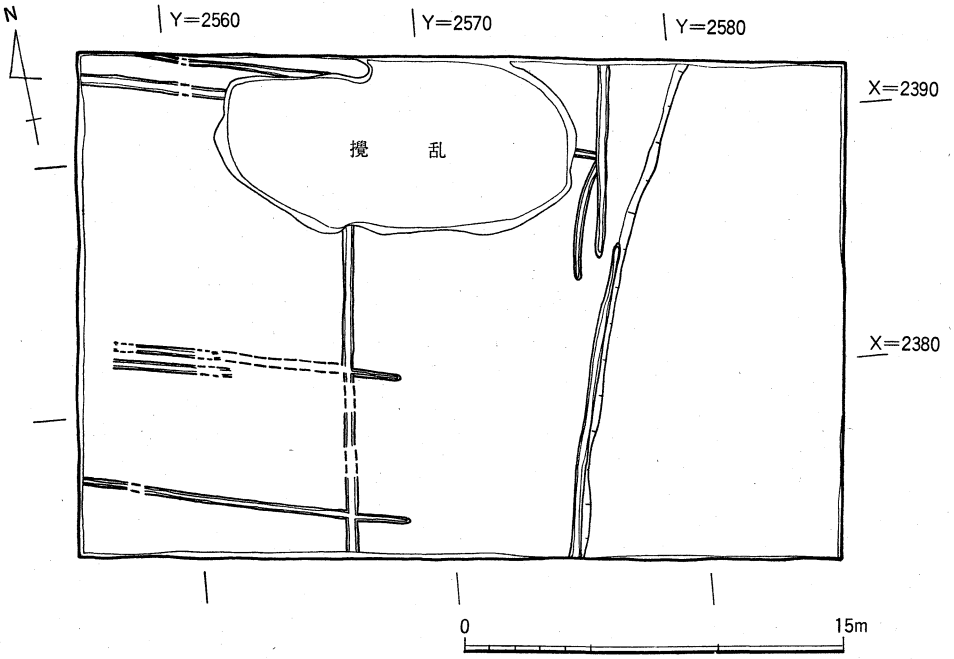

図16　近世の遺構　縮尺1/300

4　遺　　物

出土遺物は縄文時代から近世にわたっている。このうち，縄文時代から古代にかけてのものと，中世のものについて詳述したい(図版10・11，図17・18)。

縄文～古代のものは，黄褐色砂質土，ＳＲ２，茶褐色砂質土などから出土している。

Ⅱ５～Ⅱ８は黄褐色砂質土出土遺物である。Ⅱ８は篦描直線文を特徴とする畿内第Ⅰ様式の壺，Ⅱ５・Ⅱ６は櫛描直線文を特徴とする畿内第Ⅱ様式の壺，Ⅱ７は弥生中期の近江系の壺である。黄褐色砂質土は，このような弥生時代の遺物を含むとともに，古墳時代前半期の遺物を包含している。なお，Ⅱ９は中世の遺物包含層の茶褐色土に混入していたものであるが，畿内第Ⅴ様式の甕である。

Ⅱ１～Ⅱ４・Ⅱ10～Ⅱ27はＳＲ２出土遺物である。Ⅱ１・Ⅱ２は縄文前期末の大歳山式。Ⅱ３・Ⅱ４は畿内第Ⅱ様式の壺で，櫛描直線文の下端を櫛状工具によって刺突するものである。Ⅱ10～Ⅱ14は受口状口縁をもつ近江系の古式土師器である。Ⅱ13は口縁端部に面取りをもち，「く」の字状口縁の屈曲部が鋭い。Ⅱ10～Ⅱ12・Ⅱ14は口縁端部に面取りをもたず，屈曲部はⅡ13にくらべてあまい。胎土もⅡ13にくらべてあらく，色調は橙褐色を呈しており，焼きもあまい。Ⅱ15は口縁端部が内面に肥厚する布留式甕である。Ⅱ10～Ⅱ12・Ⅱ14は琵琶湖湖西の北部にみられる布留式併行期のものに類似している〔中西85〕。Ⅱ13は，布留式併行期ないしそれに先行する近江系甕である。このように，Ⅱ10～Ⅱ14の近江系甕と布留式甕は，布留式併行期の山城盆地東北部のセット関係を示す可能性がある。したがって，従来想像された以上に，近江系甕の流入は著しいものであった可能性がある。また，近江系甕のうちでも，琵琶湖湖西の北部との関係が緊密であったといえよう。

Ⅱ19～Ⅱ27は須恵器である。Ⅱ24は３方に透しをもつ高杯，Ⅱ25は壺，Ⅱ26は杯蓋，Ⅱ27は器台である。これらⅡ24～Ⅱ27は，陶邑古窯址出土須恵器のＴＫ23型式・ＴＫ47型式に相当するものであり，ほぼ５世紀末から６世紀初頭の年代が与えられている〔田辺66〕。またⅡ19～Ⅱ23の杯身は口径10cm前後であり，隼上りⅠ・Ⅱ段階に相当しよう〔菱田86〕。すなわち６世紀末～７世紀第１四半期に属する。Ⅱ16～Ⅱ18は土師器甕である。Ⅱ18は外面底部を削る近江系の甕である。これらⅡ16～Ⅱ18は，出土須恵器にともなう段階の土師器甕と考えられる。すなわち，５世紀末～７世紀初頭に属するものである。以上のように，ＳＲ２は，縄文土器や４～５世紀の遺物を含むものの，埋積した時期は６世紀末～７世紀第１四半期以降とすることができよう。

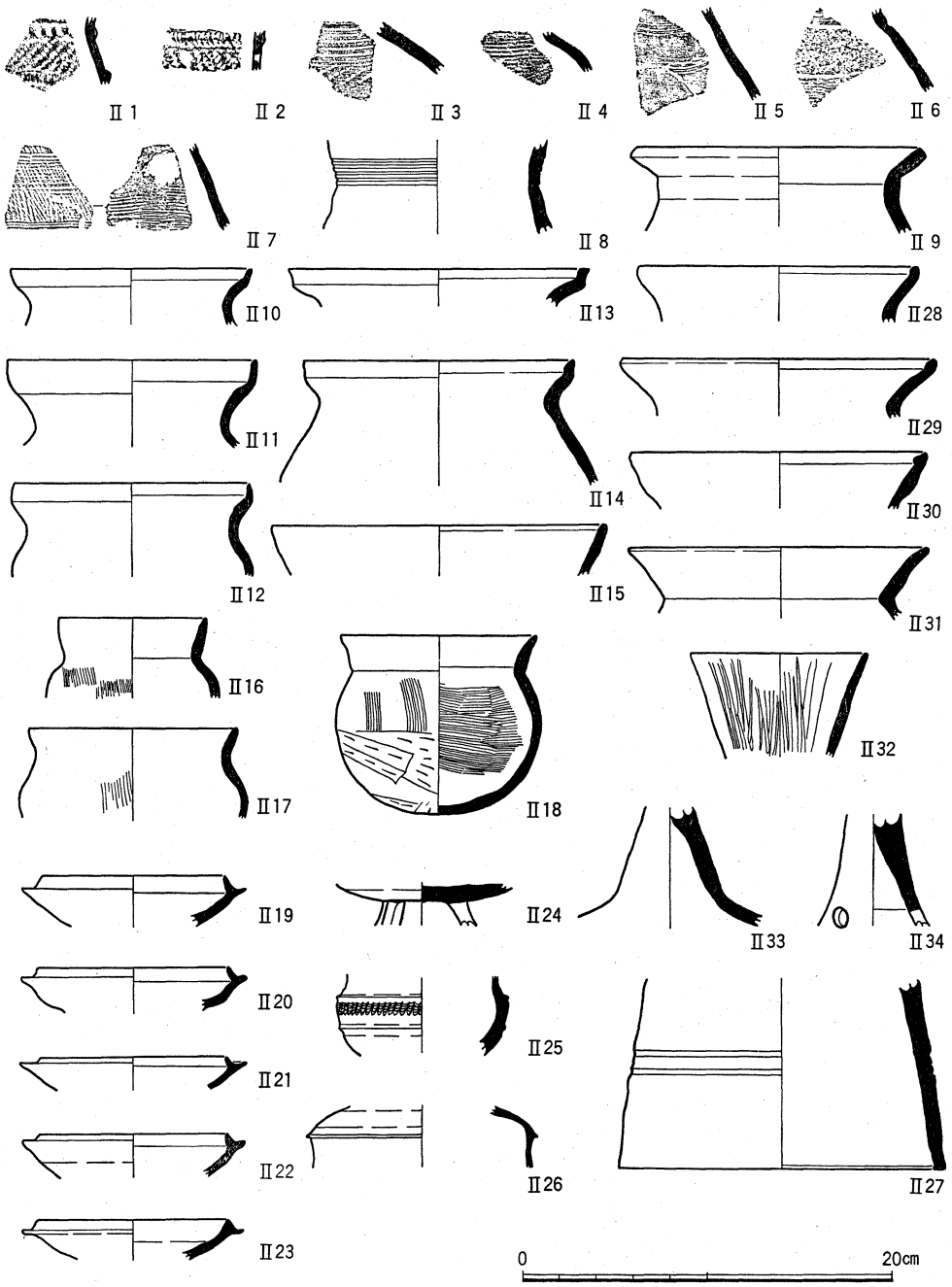

図17　ＳＲ２出土遺物（Ⅱ１・Ⅱ２縄文土器，Ⅱ３・Ⅱ４弥生土器，Ⅱ10～Ⅱ18土師器，Ⅱ19～Ⅱ27須恵器），黄褐色砂質土出土遺物（Ⅱ５～Ⅱ８弥生土器），茶褐色土出土遺物（Ⅱ９弥生土器），茶褐色砂質土出土遺物（Ⅱ28～Ⅱ34土師器）

Ⅱ28～Ⅱ34は茶褐色砂質土出土遺物である。Ⅱ28～Ⅱ30は口縁端部内面が肥厚する布留式甕である。Ⅱ31は，型式学的にはⅡ28～Ⅱ30の布留式甕に後出するものである。Ⅱ32は内外面に縦方向の篦磨きをもつ小型丸底壺。Ⅱ33・Ⅱ34は土師器高杯の脚部。ともにしぼった脚部を杯部底面にソケット状に挿入するものである。またⅡ34は円形の透しをもつ。これらの茶褐色砂質土の出土遺物は，布留式を中心とする時期のものが主体で，若干時期の降るものも含んでいる。後述するように，茶褐色砂質土は中世の遺物も含んでおり，これら古墳時代の遺物は，北白川扇状地に存在する古墳時代集落にともなうものであろう。

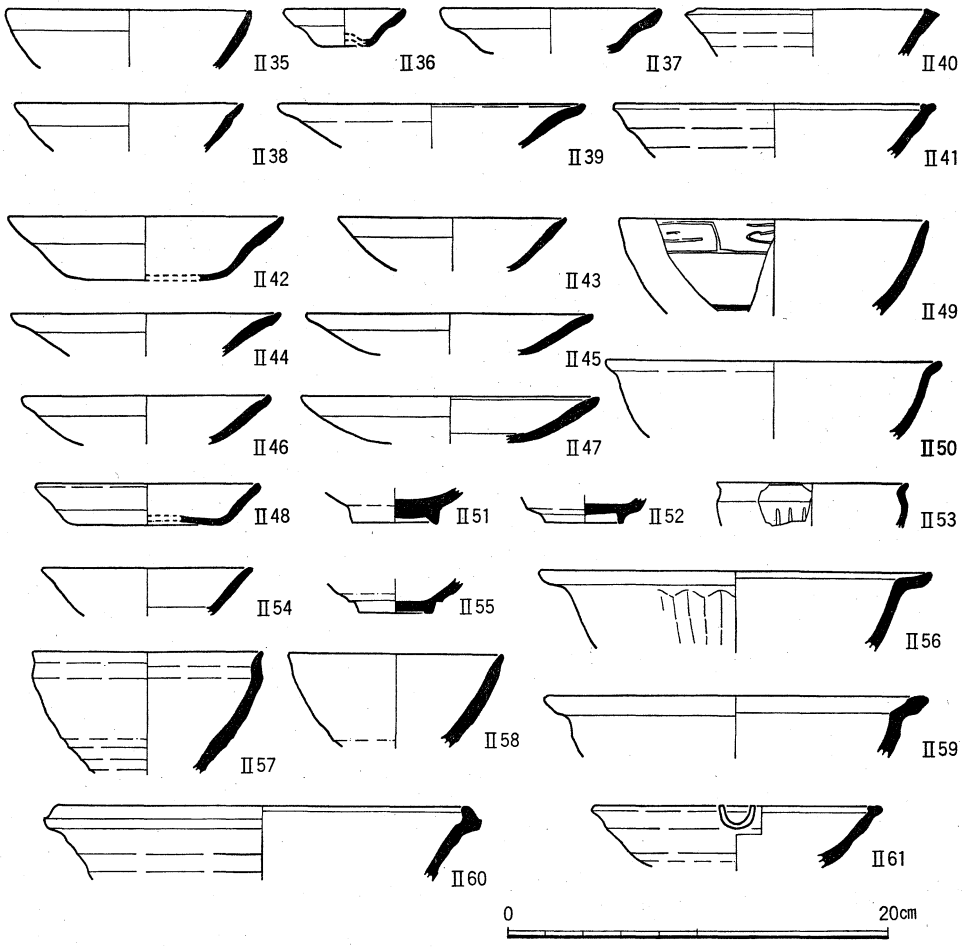

図18　ＳＲ１出土遺物（Ⅱ35～Ⅱ39土師器，Ⅱ40・Ⅱ41灰釉系陶器），茶褐色土出土遺物（Ⅱ42～Ⅱ47土師器，Ⅱ49～Ⅱ54・Ⅱ56青磁，Ⅱ55青白磁，Ⅱ57・Ⅱ58天目椀，Ⅱ59・Ⅱ61灰釉系陶器，Ⅱ60須恵器），茶褐色砂質土出土遺物（Ⅱ48土師器）

小　　結

中世の遺物は，ＳＲ１，茶褐色土，茶褐色砂質土から出土している。

ＳＲ１出土遺物には，土師器椀（Ⅱ35・Ⅱ36），土師器皿（Ⅱ37～Ⅱ39），灰釉系陶器（Ⅱ40・Ⅱ41）などがある。Ⅱ35は灰白色の椀，Ⅱ36は灰白色の凹み底小椀。Ⅱ37は口縁下端部が肥厚するE_4類土師器皿，Ⅱ38・Ⅱ39は口縁が直線的で撫での部分が外反するF_2類土師器皿。Ⅱ40・Ⅱ41は灰釉系陶器おろし皿である。これらはⅡ35を除けば，中世京都Ⅲ期に属するものである。すなわち15世紀代のものである。

Ⅱ42～Ⅱ47・Ⅱ49～Ⅱ62は，茶褐色土出土遺物である。Ⅱ42～Ⅱ46はF_2類土師器皿，Ⅱ47は口縁が直線的に開き，底部見込みにかすかな圏線をもつF_3類の土師器皿である。Ⅱ49は龍泉窯系篦描雷文帯青磁椀，Ⅱ50は青磁椀，Ⅱ53は線描蓮弁文青磁小鉢，Ⅱ51・Ⅱ52は青白磁椀底部，Ⅱ54・Ⅱ62は青磁皿，Ⅱ56は蓮弁文青磁洗，Ⅱ55は青白磁椀，Ⅱ57・Ⅱ58は美濃・瀬戸の天目椀，Ⅱ59は灰釉系陶器鉢，Ⅱ61は灰釉系陶器おろし皿。Ⅱ60は須恵器すり鉢である。主体を占めるF_2類土師器皿は，中世京都Ⅲ期に属し，型式学的にF_2類より新しいF_3類土師器皿は中世京都Ⅳ期古段階に属する。したがって，茶褐色土は，ＳＲ１同様，中世京都Ⅲ期を中心として，中世京都Ⅳ期古段階まで存続するものと考えられる。すなわち15世紀～16世紀前葉のものである。龍泉窯系青磁椀・小鉢や美濃・瀬戸の天目椀もその時期に属するものであろう。

茶褐色砂質土出土のⅡ48は，E_1類土師器皿で，14世紀前葉ごろのものである。茶褐色砂質土は中世の遺物が少なく，年代の特定が難しいが，15世紀～16世紀前葉の茶褐色土やＳＲ１より古い段階の可能性が認められる。

5　小　　結

本調査区は北白川扇状地末端の微傾斜地に位置している。調査開始前には，縄文集落が営まれた北白川扇状地末端の状況や旧白川系流路について，なんらかの手掛りが得られるのではないかと期待されていた。ところが，調査の結果，これまで京都大学構内では類例の少ない，古墳時代前半期や６世紀末～７世紀初頭，あるいは中世後半の15世紀～16世紀初頭の資料がまとまって出土した。これにより，北白川扇状地末端の土地利用の変遷を考える上で，新たな解釈が必要となった。

ＳＲ２には，縄文前期末の大歳山式など若干の縄文土器を含むが，これは扇状地上部からの流れ込みであり，縄文時代の北白川追分町遺跡の中心部は本調査区までには達していないことが判明した。また，現在の御蔭通りを旧白川系流路の一部とする考え方もあるが

〔藤岡78〕，これにともなう地形ないし旧河道は，本調査区では検出されていない。なお，黄褐色砂質土下で部分的に深掘りをして調査した結果，高野川系砂礫が検出されている。高野川系砂礫の埋積時期は不明であるが，高野川が西に向けて流路を変更して行く過程でできた自然堤防が，後背湿地を作り上げたものと考えられる。後背湿地形成後に堆積した黄褐色砂質土は，弥生～古墳時代の遺物を含むところから，従来考えられてきた旧白川系の黄色砂ではなく，古墳時代に新たに扇状地上部から再堆積したものと考えられる。こうして，黄褐色砂質土の堆積後，安定した段階にＳＲ２，ＳＢ１が形成されたものと推測できる。

６世紀末～７世紀初頭以降に埋積したと考えられるＳＲ２は，布留式段階，５世紀末～６世紀初頭，６世紀末～７世紀初頭の３段階の遺物を含んでいる。主体を占めている布留式期の遺物は，京都大学構内では初出例であり，東山一帯では岡崎遺跡〔京都市編83〕で同時期の資料が出土しているのみである。岡崎南御所採集遺物〔飛野83〕と同様，本調査区では，布留式併行期の近江系甕が認められ，比叡山を境として琵琶湖湖岸との関係が，緊密であったことがわかる。また，この時期，琵琶湖湖西の南部には，畿内型甕の出土比率の高い地域があり，畿内中心部との緊密な関係をもつ集団の存在が想定されている〔中西85〕。本調査区では，定量的なあり方ではないが，比較的近江系甕が多く見られる。今後，山城北部における畿内型甕と近江系甕の比率には，注意を向ける必要があろう。同時に，これらは流れ込みであり，本調査区北東の扇状地には，古墳時代前半期の集落が形成されていたことが予想される。またＳＲ２に包含された５世紀末～６世紀初頭の須恵器は，教養部構内ＡＰ22区検出の古墳群〔五十川・飛野84〕に対応する時期のものである。さらにＳＲ２から出土した６世紀末～７世紀初頭の遺物は，北白川小学校内遺跡〔京都市編83〕のものに対応している。ここでは７世紀前半の建物跡が検出されている。またこの集落跡は，北白川扇状地一帯に大規模に存在した可能性が指摘されており，掘立柱建物の配置にも計画性がうかがえるとされる。ＳＢ１もこのような掘立柱建物群の延長に属するものであるかもしれない。すくなくともこれらの遺物は，扇状地上部に存在した遺跡群にともなう遺物と関係するものであることは間違いないであろう。

一方，中世の遺物は中心が15世紀～16世紀初頭に限られる。この年代は，土豪を中心とした中世後期の自衛村落である田中構に対応するものである。田中構は文献史料においても15～16世紀代にかけて３回の焼き打ちを受けた事実が知られる程度で，正確な範囲やその実態も不明なままである。その範囲を田中野上町・里ノ前町に比定する考え方〔山下86〕

もあり，本調査区とはかなり離れている。しかし，この時期の厚い遺物包含層である茶褐色土は，調査区中央部を南北に流れるＳＲ１により画され，調査区西半部のみに存在している事実は興味深い。ＳＲ１は幅６ｍにおよび，厚く堆積する茶褐色土を画するための濠であるとするならば，ＳＲ１は田中構一帯の中世村落の地境を設定したものとも解釈できる。田中構そのものは，かなり地域的に限定されようが，それに附属する水田などは，田中構の周辺に広がっていたものと想像される。その意味で，ＳＲ１は広義の田中構一帯の中世村落の範囲を限定するものであるかもしれない。ともあれ，本調査で認められた土地利用形態は，中世後期の自衛村落に対する一資料を呈示したことになると考えられる。

以上，本調査区の成果により，北白川扇状地末端の形成過程が明らかになった。また，本調査区東方の北白川扇状地では古墳時代から古代初頭の集落，西方では田中構にともなう中世遺構の存在が予想されることとなった。今後，周辺の調査により，これらの実態がより明確になるであろう。